

# さくらゐ川



第四十五号

平成十五年四月一日

熱日高彦神社社務所

電話〇二四 六一〇二四一

### がんばれ こどもみこし!

昨年の春祭は数十年に一度の陽気に恵まれ、梅も桜も水仙も満開の中を神輿は進みました。写真に収められた方も多かったことでしょう。

転じて今年は例年以上に寒く、桜の花の下で・・・とはいかなそう。

そんな年毎の気候には関係なく、いつも元気なのは子どもたち。集まれば笑顔と歓声であたりはパーッと明るくなります。

島田の春と未来は、きっとこどもみこしに乗ってやって来るのでしょうかね。

### 新体制二年目の春祭

四月六日の春祭に向けて、総代と神輿世話人が中心となり各団体にもご協力を呼びかけ、神輿担ぎ手の勧誘をしていただいております。今年はずいぶん多く参加いただけるものと期待しています。次代を担う人達に、島田の伝統文化に主体的に関わっていただく良い機会です。氏子の皆さまにはかさねてご理解と協力をお願い致します。

春祭日程(時間的に区切りとなる場所を記しました。神輿の行程は例年通りです。)

- 八〇〇 祭典執行
- ..三〇 神輿奉仕者集合
- 九三〇 発輿
- 一〇一〇 はぐくみ学園
- ..五〇 三嶋神社
- 一一一〇 三月殿
- ..三〇 御行屋
- 一二〇〇 郷主内(ここから車で高橋 林へ移動)
- ..二〇 林
- ..三〇 毘沙門・館島田公民館(空腹)
- 一三〇〇 公民館出発(行人坊方面へ)
- ..三〇 原
- 一四〇〇 神社(一旦還幸 空腹)
- ..三〇 発輿(二社神輿連行)
- 一五一〇 川原
- ..三〇 鐘撞堂(胴上げ 二社分かれ)
- 一六〇〇 神社 還幸祭
- ..三〇 終了 直会

神社マメ知識 ～ 春祭・神輿とくじょう ～

担ぎ手勧誘しており「みこ」を担いで「つ」から抜粋掲載

Q 春祭ってどんな意味があるの？

A お日高さんの一番大きなお祭。ちよつと種まきや芽生えのころに並びます。鎮守神さまにたくさんのお供え物をしてその年がおだやかで作物が豊かに実りますよつと願って部落ごとでお祈りします。そのお社が秋の新嘗祭です。

Q みこって何？

A みこは漢字で「神輿」。神「はもちろん神様の」で「輿」は尊い方をお乗せするもの。つまり神様をお乗せするもの＝神様の乗り物です。

Q みこはいつからあるの？

A いつからかは定かではありません。少なくとも江戸時代にはすでに行われていました。

Q どうしてみこを出すの？

A みこが出るのを渡御(でぎよ)といいます。神社でお祭りをした上さらに、神様に直接、各部落にお越しいただいて、家々や田畑を実際に「ご覧いただき、さらに大きなご加護と恵みをお願いする。それが神輿渡御の目的です。

Q なんて担ぐの？

A 神様をお連れするのに「いちばんていねいな方法」は、部落の人たちが自分たちの手でお運び申し上げるのです。しかも「きん」だけ多くの手ではぎやかにお連れすれば、それだけ神様がお喜びになり、たくさんのお恵みがいただけると考えられています。また、適度にお祈りして「ごみこ」の神威

が増すといわれます。神「は年配者の役目ではありませんが、これだけは若者が代わってご奉仕し、元気に担いで、多くの「ご加護を願うのです。

Q みこは通る道が決まっているのはなぜ？

A 歴史的なことははっきりわかりませんが、いすれにしても、今の順路は島田の各部落を一巡するの「ちよつと」に思えます。また、神輿渡御の道筋は簡単に変えるものではないと考えられてきました。今の順路は、遠い遠い「先祖様からの渡御の道」なのです。



Q 何箇所かで決まって休むけど？

A おこしかけば「御輿掛場」といいます。神輿が一日で全戸をまわるのは「ちよつと無理」です。そこで部落の人たちがその場所に集まってお祭りをし、お参りするのです。部落の神社があったり、旧家の屋敷だったり、それぞれに歴史ある場所です。

Q 香取神社のみこって「緒」まわるのはなぜ？

A 熱日高彦神社を中心に「香取神社と鹿島神社がまつられたといわれ、お祭りの神輿もお日高さん

の神輿に香取・鹿島さんの神輿がお供したのでしょつ。現在は鹿島神社の神輿は参加せず、二社の神輿の連幸となっています。また一説に、お日高さんが男神様で、香取社が女神様。男女の神様が春の種まきを前にお会いになり、一年の繁栄の源をお授けになると言われています。鐘撞堂の所で別れに行われる胸上げは勝った方が豊作になると言われていますが、神輿の軽い香取社の方が一歩譲るのが慣わしのよつとになっております。いすれにしても、他にはあまり例のない特徴です。

Q 女性の参加は？ 他地区の人はダメなの？

A 女性も参加頂けますし、他区の方でも趣旨に賛同し「ゆる」を守っていただけるなら大歓迎です。

こがいみねじんじや 蚕養嶺神社小考

境内社蚕養嶺神社は「蚕を養う」と標記され養蚕の神さまとして崇敬を集めてきたわけですが、本来は山の神や農耕神の性格も兼ね備えていると以前に書きました。

先日、新地の駒ヶ嶺に鎮座する子盾嶺(コビミネ)神社に参拝したとき「

・「ご祭神が同じ

・馬の守護神としても崇敬された

・姫君と馬のはなしが伝わっている

ことを知りました。「コビミネ」の読みはほんらい「コマガミネ」で、地名の「マガミネ」につながると推察されます。注目したいのが「馬の神さま」「姫君と馬」で、これは若手馬などに伝

わるオシラサマ信仰（馬と良い仲になった娘が、切られた馬の首とともに天にのぼり、あとに馬の顔に似た虫＝蚕をのこしたという言い伝え）につながるものでしょう。境内社のコガイミネも本来コマユミネであり、ゆえに蚕の神さまとされたとも想像できます。女性が主体と言う点も、オシラサマアソビ（馬の首の形の棒に布を着せる習俗）を女性が行うことに共通します。

小さなお社（おやしろ）ではありませんが、さまざま信仰が重なっているゆえに、多くの崇敬を集めてきたと言えますでしょう。

「夏も近づくと八十八夜」。蚕養嶺神社の



例祭日、八十八夜は五月二日になります。豊作を祈ってお参りください。

また、八十八夜に登拝したといわれる大森山は、昨年の育成会と大森会に続き、二月に斎藤仁、門馬忠男両氏の協力ですらに切り払われました。初夏には一面に山つつじが咲き誇り気持ちの良い登山が楽しめます。



大森山から伊具盆地を望む

お口高さんの自然

フキの花芽…ふき 薹とう

三月の半ばというのに、雪がちらつき真冬並みの日々が続く春の気配はまだまだと思われ今日この頃である。とはいっても、道端ではオオイヌフグリのうす青色の花も多くなり、里山では稲穂のようなマンサクの花も咲きはじめ、確かに季節は進んでいる。

さて、早春の山野草として親しみ深い薹の薹がある。前の年の夏から秋にかけて次の年の花芽がつくられる。十一月頃には大きくなっているものもあり利用できる。フキは最も

種類数の多いキク科植物であり、菊やタンポポなどと同じ仲間である。雌花を咲かせ種子をつくる雌株と、花粉をつくる雄花の咲く雄株の区別があり、雌雄異株（しゅういしゅ）の植物（例えばキュウイフルーツなど）である。花が終わると、雌株は花茎が三〇〜八〇センチメートルにも伸びタンポポのような白い冠毛が目立つ。一方、雄株は花茎が二〇〜三〇センチメートル位しか伸びず、花茎は早めに枯れてしまう。

余談だが、フキは、日本では九世紀頃からウドやミツバ、セリとともに数少ない日本原産の野菜として利用されてきた。現在の主な生産地は、愛知と大阪である。薹が開きはじめると、やがて本格的な山菜のシーズンも近い。（文/小島和夫氏）



# 名譽宮司黒須いよの氏逝去

## 史上初の女性宮司として戦後乗り切る

去る二月一九日熱日高彦神社の黒須いよの名譽宮司が逝去し、二月二五日に当神社と社家黒須家の合同本葬が島石公園において執り行われました。

通夜を含め八百人に近い会葬者は、前夜の雪の融けた春泥と、風花の舞う中、当地区としては珍しい儼かな神葬により、お別れをしました。名譽宮司は享年九十三歳、当神社奉仕五〇年。戦後GHQの、神社に対する悪宣伝による人心の迷いの中で、史上初の女宮司として神社を守り、今日の女性神職の道しるべとなったという功績によって、神職身分二級上と神社本庁表彰規定により表彰を受けています。

### 御礼

この度二月二五日に島石公園において斎行致しました当神社故黒須いよの名譽宮司の当神社と社家黒須家の合同本葬に際し、大変お寒い中、わざわざご参列いただき、心からなる甲意をお示しく下さいましてまことに有難うございました。

戦後の思想混乱の中、定雄前宮司の戦死をうけ潔く初の女宮司となり、神社の急を救った上に五〇年奉仕の中で神社興隆に尽くされた黒須いよの刀自命に対して皆さまとともに感謝するとともに、その心を受継いで今後の神社経営に邁進致しますので、よろしくご協力、ご指導くださるようお願い致します。

熱日高彦神社 宮司 黒須 主 計

総代長 佐藤 庄 一

総代役員 一同

## 社頭 あれこれ

### つつがなく新春の迎え

平成十五年の正月行事はおかげさまで全てつつがなく斎行できました。

午前零時の歳旦祭は、大型ストープ二台と座布団で、少しは暖かく(?)参列いただけたのだとは思っております。ただ日中に社殿も授与所も開いていないのは寂しいことで、さっそく来年の課題と致します。

各家の神棚をお祭する「おひまち」は、なるべくご希望の日につかがえるよう努力いたしました。ご家族そろって参列いただけたご家庭が多かったように思います。

斎火祭の晩はいつになく暖かで、そのせいもあってか平日にも関わらず例年以上の参拝者で賑わいました。一一〇体もの和紙灯籠のご奉納、また各方面の皆さまにご助力いただき、無事盛大に斎行できました。感謝申し上げます。

### 社頭 暦

四月 一日 月次祭

六日 春季例大祭・神輿渡御

一九日 みどりの日(昭和天皇誕生日)

五月 一日 月次祭

二日 蚕養嶺神社例祭 八十八夜

三日 憲法記念日

五日 端午の節句 子どもの日  
六日 立夏  
六月 一日 月次祭  
三〇日 水無月大抜

### 《編集後記》

神輿担ぎの継承には皆様にご支持いただいているところですが、「神輿のほかにも続けていかなくてはならない行事や習俗がたくさんあるだろう」という指摘も少なからずいただきます。そのとおりで、社寺に限らず、各家や地区での色々な祭りや慣わしがそれぞれの年代や集まりによってすっかり伝えられてはじめて、地域独自の伝統文化が育まれます。

一方「生活が成り立ってこそなので、そちらを優先せざるを得ない」という切実な話。これにはやむなしと納得するほがありません。可能な範囲で協力しあわなければなりません。お日高さんは伊具郡で最も古く千数百年の歴史を有します。つまり島田はそれほど永く誇れる歴史と文化の郷なのです。が、それは、幾度もの盛衰を繰り返しながら、その時代に応じ先人が知恵を凝らしながら、現在にまで伝えてきたのでしょうか。何故そうしてこられたのか。おそらく「先祖から受け継いだ大切なものを子孫に伝えていく」という気持が心の底ににあったからだと思えます。年々に枝葉を整えながら、常に幹にも心を配り、年月をかけて大樹をまもり育てるということでしょう。神社では今、多くの課題について、その場限りでなく未来を見据えた中で取り組んで行くことという模索が始まっています。

ホームページでも読める <http://hitaka.org>